

參考

巴里講和會議ニ支那全權ノ提出セル
解決ヲ要スル諸問題ニ關スル覺書(抄譯)

(巴里一九一九年四月)

目次

- 第一 勢力範圍拋棄問題
 - 第二 外國軍隊及警察隊撤退問題
 - 第三 外國郵便局及有線無線電信局撤廢問題
 - 第四 領事裁判制度廢止問題
 - 第五 租借地拋棄問題
 - 第六 外國租界返還問題
 - 第七 關稅自主權回復問題
- 結論

REEL No. 1-0116

0497

(抄譯)

序

二十世紀初頭以來特ニ舊帝制ヲ變改シテ共和制ノ確立ヲ見タル一九一一年革命以來、支那ハ行政經濟方面ニ於ケルト同シク政治的ニ顯著ナル進歩ヲ遂ケタリ

然レトモ支那ノ自由ナル發展ハ幾多ノ國際的障礙ノ爲メ遲延セラレツツアリ
斯ル障礙事項中或モノハ既に消滅セル事態ノ結果ニ過キサルモノアリ又或モノハ公平正義ノ觀念ニ背馳セル近時ノ壓迫ノ結果ニ他ナラサルアリ斯ル妨碍ノ存在ハ永劫ニ難題紛議ノ續出ヲ斷ツ能ハサルヘシ今ヤ平和會議ニ於テ正義、平等及國家主權ノ尊重ニ立脚シテ新時代ノ建設ヲ企ツルニ際シ極東ニ於ケル如上將來紛争ノ禍根ヲ殘置スルニ於テハ吾人ノ事業ハ斷シ

テ完全ナルコト能ハサルヘシ

於茲支那全權ハ尙モ本會議參列諸國カ領土保全、政治的獨立、經濟的自主ノ諸原則ニ準據シテ支那ノ自由發展ヲ圖審スル障礙ヲ除去セント欲スルニ於テハ本會議ニ於テ新規解決ヲ要スル諸端ヲ列記シタル本覺悟ヲ提出スルノ光榮ヲ有スルモノナリ

第一 勢力範圍攪奪問題

(一) 勢力範圍ノ現狀

支那政府ハ從來支那ノ經濟的發展ヲ急カントスル熱望ニ基キ世界列國カ莫大ナル人口ノ廣大ナル富源ヲ有スル支那ノ通商及投資ニ關シ支那カ提供スル便宜ヲ均等ニ利用セシムコトヲ欲シ居タルモ斯ル自由的思想ハ國ヲスモ數國カ要求ニ係ル「勢力範圍」ナル障礙ニ衝突セサルヲ得サリキ此ノ要求ヲ據ツテ立ツ所ハ所謂勢力範圍内ニ於テハ要求國ノ特殊ノ領土的利益若ハ優越又ハ排他的通商及投資ノ特權ヲ享有スヘシトイフニ在ルカ如シ

而シテ勢力範圍設定ノ要求ハ一ハ支那ノ加入セサル列國間協定ノ形式ニ依リ他ハ支那トノ強力ニ依ル條約又ハ協定ノ形式ニ依ル第一種ニハ一八九八年九月二日英獨兩國銀行團間ニ締結セラレタル鐵道及設ニ關スル協定及一八九九年四月二十八日支那ニ於ケル英露兩國鐵道ノ相互利益ニ關スル英露間協約ヲ舉ケ得ヘク第二種ニハ所謂「租借地爭」ノ時代ニ締結セラレタル不割讓約款ト稱セラルルモノ特ニ一八九八年三月六日ノ膠州灣租借ニ關スル獨逸トノ協約及一九一五年五月二十五日日本ノ二十一ヶ條要求ノ結果締結セル條約ヲ舉ケルヲ得ヘシ

(二) 勢力範圍ノ弊害

勢力範圍ノ要求ハ種々ノ理由ヨリシテ當テ得タルモノニ非ス第一ニ右ハ支那ノ經濟的發展ヲ阻害スルモノナリ其ノ眼目ハ要求國ノ利益如何ノミニ存シ其ノ範圍ニ屬スル領土ハ何等支那ノ利益ヲ考慮

セスシテ要求國民ノ單獨開發ニ留保セシタルモノト考ヘ資本ノ自
然ノ流入ヲ堰止シ物資購入及技術專家採用ニ付選擇ノ自由ヲ否定
シ需要供給ノ原則ノ運用ヲ妨壓セントスルモノナリ此等諸國カ其ノ
勢力範圍ナリト思惟セル地方ニ於テ特定企業ノ實行ニ必要ナル資本
及専門家ヲ得ル能ハス而モ他國カ之ヲ供給シテ該企業ヲ遂行スルコ
トヲ拒絶スルカ如キ場合ハ決シテ僅少ナラサルナリ
斯ル政策ハ商工業上ノ機會均等ノ原則ヲ犯ス結果トナリ他國ノ共同
利益ヲ害スルモノナリ即チ該地域ニ於テ鐵道敷設又ハ鑛山其他工業
的企業ヲ行フ特權ヲ有スル國ハ他國ト共ニ利益ト危險トヲ煩ツコト
ヲ爲サス漸次其地方ニ於ケル經濟征復ノ凡ユル手段ヲ其ノ掌中ニ收
メツツアリ

更ニ一層大ナル不都合ハ一國ノ爲ス斯ル要求カ他國ノ同種要求ヲ誘
發スルニ在リ故ニ列國カ各々右要求ヲ固執スルニ於テハ結局全支那
ノ統一的經濟發展ヲ齎スコト能ハサルノミカ支那共和國ノ領土保全
及政治的獨立ヲ脅威シ且極東ノ平和ヲ危ウスルカ如キ國際的嫉妬及
軋轢ヲ生セシムルモノナリ故ニ世界ノ眞ノ利益並支那ノ國際的地位
ノ見地ヨリスレハ列國ニ於テ斯ル惡制タル勢力範圍獲得要求ニ對シテ
セサルヘカラス

(三) 結論

支那政府ハ如上考察ニ立脚シ關係列國カ支那ノ主權ヲ列國自身ノ共
同利益ヲ誠實ニ考慮シ將來新ナル勢力範圍ヲ要求セス且既存ノ分ニ
付テハ關係條約協定等ヲ改正スルニ吝ナラサル旨ヲ宣言セシコトヲ

第三 外國軍隊及警察隊撤退問題

(但シ租借地及外國租界ニ關シテハ後ニ論スヘシ)

(一) 二部會電ノ外國軍隊

(A) 協定ニ基ク駐屯軍ニ對スル論駁

(イ) 一九〇一年ノ議定書(協定國日、英、米、佛、白、伊、露、奥、和、西ノ十一國中)西ハ駐兵セシメスニ準據シテ支那ニ駐屯セラルル軍隊ニ付テハ支那政府ハ最早其ノ必要ナキモノト認ム元來本議定書ハ團匪事件ノ結果作成セラレタルモノナルモ其實北支那ニ軍隊ヲ駐屯スヘシトノ計畫ハ同事件ノ直前狀態ヨリ既ニ萌芽ヲ發シ居タルモノナリ然ルニ今日ニ於テハ斯ル駐兵ヲ必要トスル狀態ハ其跡ヲ絶テ特ニ數年來内亂勃發ノ際ト雖支那

人以外國人ノ生命財産ニ關シ固然ニ其ノ保護ヲ重キクシテ實現

(5) 公使館守備隊及北京奉天間鐵道沿線所在軍隊ノ駐屯モ亦支那主權ノ侵害ニシテ支那民族ノ自尊心ヲ傷ムルコト甚シキモノアリ
公使館區域ナル特種區域ノ存在ニ付又同シ斯ル屬屬的制度ノ存在ハ世界首都中ニ其ノ比ヲ見サル所ナリ

又此等外國守備隊ノ存在ハ其駐屯地方ノ平和秩序ヲ亂ス基トナルモノナリ列國兵間ニ爭論ノ上ニシテ場合特ナラサルカ爲ナリ面シテ其ノ都度支那官憲ノ苦心ヲ爲モノアリ

(2) 何等條約上ノ根據ナキ駐屯軍隊ニ對スル論殿
(4) 此中ニ包含セラルヘキモノハ日露戰爭ヲ言其ノ日露ノ滿洲

鐵道守備隊、一九一一年漢口ニ於ケル日本軍六百名、一九一二年遼陽ニ於ケル日本軍、青島及山東鐵道沿線ニ於ケル日本軍二名及二十世紀初頭以來ノ新疆喀什噶爾駐屯ノ英陸軍等ナニ等ハ前項協定ニ基クモノヨリモ一層強硬ニ急進撤退ヲ要求スルノ理由アリ

四 列國駐屯軍間友好關係ヲ破壞スヘキ危險頗ル多シ日露戰爭ノ勃發ハ之カ逆例ナリ
五 駐屯國及支那間ノ交誼ヲ侵害スルコト甚シク特ニ日本軍及支那國民間ニ惹起セル不幸ナル事變ハ放棄ニ憑アラサルモノアリ彼ノ二十一ヶ條要求提出ノ遠因又茲ニアリ

(3) 結論

以上諸理由ニ依リ支那政府ハ列國ニ對シ左記ニ項ニ亙リテ切願ス
ルモノナリ

④何等條約上ノ根據ナキ外國駐屯軍隊ハ即時撤退スヘキコト

⑤一九〇一年國匪事件議定書ノ關係條文ハ七條及九條一ヲ廢棄シ

駐屯軍隊ハ本平和會議ノ爲スヘキ宣言ノ日ヨリ一年內ニ之ヲ完

全ニ撤退スヘキコト

②外國警察

一九〇五年以來日本政府ハ滿洲ニ漸次警察署ヲ増置シ一九一七年

ニ^{奉天}天^{吉林}吉林兩省ニ於テ二十七ヶ所ニ達セリ此點ニ關シ日本政府

ノ理由トセル所ハ其ノ居住民監督保護上ノ必要アリテ且支那地方

官憲ノ承認シタル既成事實ナル上此特權ハ治外法權ノ當然ノ歸屬

ナリトシタリ

支那政府ノ見解ハ之ニ異リ既ニ日本居住民監督保護ニ關スル協定

存スル以上特ニ警察官ノ派遣ノ要ナカルヘク又本問題ト治外法權

トハ別箇ノモノト思考シ支那政府竝地方官憲ハ從來屢次抗議ヲ提

出シ來リタルモノナリ

支那政府ハ茲ニ更ニ抗議ヲ繰返シ條約上根據ナキ駐屯軍ニ對スル

ト同様ノ措置ニ出テントテ要望ス

第三 外國郵便局及有線無線電信局發廢問題

(1) 外國郵便電信局設置ノ由來

支那ニ外國郵便電信局ノ設置セラレタルハ一八六〇年頃主タル條約港ニ於ケルヲ以テ嚆矢トナス而シテ其ノ設置ハ何等ノ協定ニ基カズ其ノ存在ト擴張トハ單ニ支那政府ニ於テ之ヲ許容シ來リタルニ過キス

(2) 支那郵便電信局發展ノ概要

右ト時代ヲ同ウシテ支那ハ歐式郵便制度ヲ開始シテ之ヲ稅關行政ニ屬セシメヨリ其ノ進行ハ爾來年ヲ追ウテ發展シ一九一一年稅關ヨリ離レテ交通部ノ直轄ニ移サレタリ

萬國郵便聯合加入ノ招請ハ既ニ一八七八年之ヲ受ケタルモ大學ヲ

取リテ參加セス郵便制度充分完成シタリト認メタル上一九一四年九月以來同聯合ニ加入スルニ至レリ

今少シク統計ニ依リテ發展ノ沿革ヲ通觀スルニ

(1) 一九一一年交通部移管ノ際郵便事務區域ハ蒙古、新疆ニ及ビ郵便局數六二〇一ニ上リタルカ一九一七年ニハ九一〇ニ増加セリ

(2) 郵便道路ハ一九一七年末其ノ延長二十六萬軒ニ上リ一九一四年以來三萬四千軒ノ増加ヲ見タリ

(3) 郵便物總數ハ一九一一年、四億二千百萬、一九一四年六億九千二百萬餘、一九一七年九億六千五百萬餘ニ上レリ

(4) 小包事務ハ公衆ノ賞賛ヲ博シツツアルモ一九一七年中千四百四十

六箇、一億三千六百萬弗、三千九百八十萬斤即約四萬噸ヲ輸送セリ

(4) 留小包ノ制、運貨先拂荷物輸送ノ制度完備セリ

(5) 郵便爲替モ數年來運用旺盛トナリ一九一七年ニハ萬百種二千萬弗餘ニ達シ然モ誤達ノ場合極僅少ナリ

(6) 最初ハ郵便豫算ハ不足ヲ告ケタルモ數年前ヨリ齟齬ヲ生スルニ至リ一九一七年ニハ收入八百五十四萬六千弗。

支出七百十二萬四千弗。剩餘百四十二萬二千弗ハ郵便事務ノ改善擴張費ニ充當スルコトヲ得

(7) 郵便事務ノ運用ニハ多數ノ職員ヲ必要トス一九一七年末現在外國人職員ハ百名以上ニ上リ、支那人職員ハ二萬五千人ヲ超エタ

以上沿革ヲ見レハ五十年來如何ニ發展ノ著シキヤヲ了解スルニ足ルヘシ

(3) 結論

斯ノ如ク郵便事務ハ満足ニ運用セラレツツアルニ鑑ミ支那政府ハ他國ニ於ケルト同様單獨ニシテ郵便事務ヲ行フノ時機到來セリト信ス依テ茲ニ平和會議ニ對シ一九二一年一月一日ヲ期シ總テノ外國郵便局ヲ撤廢スルノ決議ヲ要求スルモノナリ
支那政府ハ又外國有無線電信局ハ既成未成種類ノ如何ヲ問ハス直ニ正當ナル補償ト引換ニ支那ニ引渡サンコトヲ要求ス

第四、領事裁判制度廢止問題

領事裁判制度ノ存在カ領土主權ノ行使ト兩立セサルコトハ茲ニ冗言
スルノ要ナカルヘシ支那ニ於ケル該制度ハ現在ニ於テモ及起源ニ於
テモ四等國際法ノ原則ニ準據シタルモノニ非ス單純ナル條約創造ニ
過キス面シテ其ノ理由トセシ所ハ支那ト外國トノ法律ノ根本的差異
及支那司法機關ノ不備ニ在リタリ

(一) 支那ノ現行裁判制度

然ルニ日英米トノ條約ニハ總テ該制度カ一時的便法タルコトヲ明
記シアリ其ノ結果トシテ茲ニ最初ニ問題トナル點ハ現在支那法律
ノ狀態及其ノ實施方法カ列國政府ヲ満足セシムルノ程度ニ向上セ
ラレタリヤ將又治外法權廢止ノ場合支那裁判權行使ニ關シ充分ナ

ル保障ヲ供與スルニ足ルヘキヤ否ヤノ點ニアリ

吾人ハ支那法律自体及其ノ實施方法カ世界最先進國ニ於ケルト同
等ノ完璧ノ域ニ達シタリトハ主張セサルモ尙支那力衛來司法行政
ニ於テ著大ナル進歩ヲ遂ケタルコトヲ揚言シテ憚ラス次ニ之カ二
三ノ例ヲ指摘スル所アルヘシ

(1) 支那ハ其ノ憲法ニ依リ先ツ(一)三權分立ノ大原則ヲ確立シ(二)全國
民ニ對シ其ノ個人的自由ノ尊重及財産ノ安全ヲ保障シ(三)司法官
吏ヲシテ公務ノ執行ニ際シ立法及行政ノ干渉ヨリ完全ニ獨立
セシメタリ

(2) 支那ハ刑法、民法、商法、民事及刑事訴訟法ノ五法典制定ヲ準
備シ其中刑法全部及訴訟法中ノ數章ハ既ニ假實施セラル此他裁

判所構成法、上下級裁判所假規則、商事會社ニ關スル命令、商
事ニ關スル仲裁裁判所規則等ハ正式ニ公布セラレタリ
敘上諸法典ハ先進國ノ夫レニ範ヲ取り支那ノ特殊必要ニ適應セ
シメタルモノナリ

(3) 地方裁判所、控訴院及最高裁判所（北京所在）ノ三種設立セラ
レタリ他方右三階級ニ照應セル三局ヲ有スル司法部アリ

(4) 訴訟法中ノ改善トシテハ民事及刑事事件ノ完全ナル區別ト裁判
及判決ノ公開トヲ擧クヘシ刑事裁判所ハ證據品及證人ノ陳述ニ
基キ判決シ強制自白ヲ目的トスル体刑ハ既ニ廢止セラル
辯護士ハ正規ノ試験ヲ通過シ又ハ相當ノ資格ヲ有スルモノニ限
ラル

(5) 裁判官ハ總テ正規ノ司法教育ヲ受ケタル者ニシテ其中大多數ハ
外國大學ニ學ヒタル者ナリ

(6) 行刑制度及警察組織改正ノ實績ハ著シキモノアリ
斯ノ如ク立法及司法制度ノ進歩著大ナルニ鑑ミ領事裁判制度存在
ノ理由ハ消滅シ敘上諸條約明記ノ條件實現ノ日遠キニ非ス

(二) 領事裁判制度ノ重大弊害及之カ廢止ノ趨勢

(1) 適用法律ノ多岐ニ亘レル點

現行規則ニ據レハ刑事事件被告ノ所屬國領事裁判所當該事件ノ
管轄裁判所タリ故ニ一ノ領事裁判所ニ於テ違法行爲タルモノモ
他ノ領事裁判所ニ於テ必スシモ常ニ然ルニ非ス即チ同一行爲ニ
對シ異レル種々ノ解決ヲ見ルコトアリ正義公平ノ觀念ヲ害スル

コト鮮少ナラス

(2) 裁判所ハ外國人タル證人及原告ニ對シ強制ノ權利ナキコト

被告ト異ナル國籍ヲ有スル外國證人召喚ノ場合裁判所ハ該證人ノ出廷ニ關シ其ノ意思ニ委スルノ外ナク假ニ出廷スルモ訊問ニ答フルコトヲ拒絕セル場合罰金又ハ裁判所命令不服從ノ罪ニ問フ能ハス又虚偽ノ申立ヲ爲スモ罰セラルルコトナシ之ト同シク外國人タル原告モ亦虚偽ノ宣誓又ハ服從拒絕ニ對シ之ヲ罪ニ問フ能ハス更ニ重大ナル缺點ハ被告カ反訴請求ヲ起スノ外辯護ノ途ナキ場合ニ於テ裁判所ハ假令該反訴請求カ如何ニ理由アルモノナルコト明白ナル場合ニ於テモ公然之ヲ知り得サルコト之ナリ

(3) 外國人タル犯人ノ犯行舉證困難ナルコト

條約ニ依レハ外國人旅行者カ違法行爲ヲ爲シタル場合「最寄ノ領事館ニ送還スルニ際シ必要アル場合ノ外之ヲ虐待スヘカラス」トアリ右ハ「海岸ヨリ千哩ノ内地ニ於テ掠奪又ハ殺人ノ罪ヲ犯シタル外國人ハ證據ヲ舉クルコト極メテ困難ナル遠隔ノ地ニ於テ判決ヲ受クル爲町寧ニ領事館ヘ送致ス」トイフニ歸ス

(4) 領事事務及司法事務ノ矛盾性

領事ノ第一ノ職務ハ自國民ノ利益擁護ニ在リ自國民保護ノ義務ト國民ニ對スル公平ナル裁判行政トハ兩立セス之ヲ一人ノ手ニ行ハシムル制度ノ存在ハ權力分立ノ新原則ニ背反スルコト明ナリ

此他ノ弊害ヲ擧クルノ要ナク本制度ハ廢止セラレヘク又至ル所ニ於テ廢止ノ趨勢ニ向ヒツツアリ(4)日本ニ於テハ一八九九年完全ニ廢止セラレ(5)暹羅ニ於テモ地方裁判所組織ノ改良ノ結果英佛其他ノ諸國ハ裁判權ノ一部ヲ地方官憲ニ讓リ後日ノ改正完成ノ上ハ其ノ全部ヲ之ニ讓ルヘキコトヲ承認セリ

(三) 結論

於茲支那ハ左記二條件達成ノ上一定ノ期限後領事裁判制度廢止ヲ要求スルモノナリ

- (1) 刑法、民法、商法、民事及刑事訴訟法ノ諸法典公布
- (2) 元地方廳所在地即チ事實上外國人居住地方全部ニ亘リ新裁判所ノ設立

支那ハ一八九二四年末迄ニ右二條件ノ實現ヲ約スルヲ以テ列國カ右條件實現直後領事裁判制度放棄ヲ約定センコトヲ要求スルモノナリ

而シテ領事裁判制度ノ決定的廢止ヲ俟チ支那ハ列國ニ對シ左記二事項ニ付同意センコトヲ要求ス

(a) 支那人ノ被告タル民事刑事事件ハ總テ訴訟手續中及判決ニ領事館側ノ出席又ハ干涉ナク支那裁判所ニ依リテノミ審査判決セラレヘキコト

(b) 支那裁判所カ合法ニ爲シタル判決ハ租界及外國人所有ノ建物内ニ於テ領事館官憲ノ豫備審査ナクシテ實施シ得ヘキコト

一朝領事裁判制度廢止ノ上ハ益スル所單ニ支那ノミニ非ス列國モ

亦支那人及外國人間紛争ヲ消滅スルコトヲ得テ益スル所多カルヘ
シ
加之支那全國民ハ列國ノ厚意ヲ感謝スヘク支那行政ハ一層圓滑ト
ナリ其ノ結果支那全國ヲ外國人ノ通商及居住ノ爲ニ開放センコト
ヲ政府ニ迫ルモノ實ニ支那國民自身ナルヘシ
斯ノ如クシテ領事裁判制度廢止ハ其ノ終局的結果トシテ支那及列
國共通ノ宿望タル國際通商ノ發展ヲ齎スヘキモノナリ

第五、租借地放棄問題

租借地ニ在リテハ租借期限中其ノ行政權ノ行使ハ租借國ニ委ヌルト
雖モ同地ニ對スル主權ハ如何ナル場合ニ於テモ支那ニ留保セララル
モノナリ加之大多數ノ租借協約ニハ支那ノ軍艦ハ租借港ヲ海軍根據
地トシテ利用スルニ付租借國軍艦ト同一ノ權利ヲ享有スル旨ノ規定
アリ（廣州灣ニ於テハ例外トシテ專ニ中立國軍艦トシテ碇泊ヲ許容
セララル）
元來租借權ナルモノハ列國ノ強迫ニ依ツテ支那ノ承諾セシモノニシ
テ滿州王朝惡政ノ結果支那ノ保全カ將ニ重大ナル危險ニ瀕セルニ際
ニ厥ツテ極力ト利益トヲ東亞ノ天地ニ求メ居タル列國カ公然ト勢力
ヲ衛チ保タシカ爲ナリト稱シテ要求セル所ナリ

爾來二十年ヲ經過セル今日四國ノ狀況ハ全然變更セリ獨逸脅威ノ除去ニ依リ極東ノ和ヲ舊シタル最大原因ハ消滅シ攻略戰豫防ヲ目的トスル國際聯盟ノ創設ハ租借權要求ノ主要理由タル列國ノ極東勢力均衡ノ理論維持ヲ無用トナシタルモノニテ租借地還附ヲ懇願スルノ一理由トナルモノナリ

最後ニ支那政府ハ租借地ノ存在カ支那ノ利益ヲ大ニ害シタルモノト認メサルヲ得ス早略上重要ナル地點ヲ占據シタルニ依リ支那ノ國防事業ヲ妨礙シ且領土保全ヲ脅威シタルノミナラス關係諸列強間ノ紛争ノ種々雜多ナル結果支那ヲ其ノ禍中ニ投シタルコト一再ニ止ラス加之租借地中或モノハ或ハ近接ノ廣大地域ニ經濟的ニ君臨セントスル爲或ハ門戶開放主義及商工業上ノ機會均等主義ヲ害シラ勢力範圍

ヲ増大スル爲ノ根據地トシテ利用セラレツツアリ
斯ノ如クシテ租借權ノ行使ハ一種ノ宗主權ヲ永久存在セシムルモノニシテ其ノ弊害日一日ト増大シツツアリ支那政府ハ今日租借地ノ完全ナル還附ヲ要求スルハ其ノ義務ナリト思惟セリ而シテ如上ノ提言ヲ爲スニ當リ土地所有者ノ權利保護及還附地ノ行政ニ關シ支那政府ノ擔フヘキ義務ヲ實行セントスル旨ノ條約ヲ列國政府ニ與フルモノナリ

第六 外國租界返還

(一) 租界ノ沿革

租界制度ノ緒ヲ開キタルハ一八四二年八月二十九日ノ英支條約ニ在リ當時租界ノ名義ニ依リ英國人ニ對シテ開港セラレタルハ廣東廈門、福州、寧波及上海ノ五都市ナリキ爾來一方英國以外ノ列國モ各別ニ支那ト條約ヲ締結シテ同様ノ特權ヲ獲得スルニ至リ他方右五都市以外新ナル租界ヲ増加シタリ

(二) 租界ノ現状ト其ノ弊害

此等租界ハ勿論支那ノ領土ニシテ從テ外國人土地所有者ハ支那政府ニ對シテ支那人ト同様ニ地租ヲ支拂フノ義務ヲ負フモノナルカ其ノ行政權ハ各國領事又ハ同租界在住外國人納稅者ノ選舉セル

政委員會ニ屬セリ而シテ此等行政當事者ハ治安維持ノ任ニ當リ居住者ニ對スル命令規則ヲ作成シ市政ニ供セラルル税金ヲ徵收シ公共建物、道路ノ建設ヲ決定シ且警察ヲ有ス

租界内居住ノ支那人ハ其數租界人口ノ大部ヲ占ムルニモ拘ラス行政委員會ニ代表者ヲ出スコトナク上海共同租界ニ於テハ全人口ノ九割五分ヲ占ムルニモ拘ラス毎年各種支那商業團ノ選舉スル三名ノ委員ヨリ成ル諮問機關ヲ存スルニ過キス

抑々租界ハ支那ノ對外貿易發展上至大ノ重要性ヲ有スル商業中心地ニシテ支那ノ繁榮ニ關シ頗ル貢獻セル所ナリ然レ共外國官憲ハ次第ニ其ノ勢力ヲ増シ終ニ支那ノ主權ヲ侵犯スルカ如キ權限ヲ占據スルニ至レリ

斯ノ如クシテ租界居住支那人ニ對スル支那ノ裁判權ハ否定セラレ
例ヘハ支那官憲ハ領事ノ認可アルニ非サレハ租界内居住支那人ヲ
逮捕スルコトヲ得ス該支那人ニシテ何等カ外國商館ニ關係アル場
合ニ於テハ該商館ノ所屬國領事ノ承諾ヲ必要トセリ上海共同租界
内ニ於テ支那人カ他ノ支那人ニ對シ罪ヲ犯シ又ハ他ノ支那人ヨリ
起訴セラルル場合ニ於テハ事件カ何等外國ノ利益ニ關セサル場合
ニ於テモ常ニ混合裁判所ノ判決ヲ受ケ然モ事實上外國陪席判事ノ
審理及判決ヲ受クルモノナリ尙又支那人カ租界内ニ進入スレハ支
那官憲ハ租界官憲カ逮捕ヲ許可スルニ非サレハ之ヲ爲シ得サルナ
リ
此他租界カ支那ノ領土タルニ拘ハラズ支那軍隊ノ通過權ハ認めラ

レズ斯ノ如クシテ事實上領土主權ヲ沒却シ一國家内ニ他ノ一國ノ
存在スル如キ現象ヲ生シタルナリ

(三) 租界返還要求ノ根據

抑々舊カ制度ヲ創設セル者カ異ンテ斯ル結果ニ到來ヲ豫見シタリ
ヤ將又之ヲ望ミタリヤ否ヤハ大ニ疑問ニ屬セリ

一八六三年北京公使團ハ上海租界ニ關スル根本原則ヲ議シ左ノ五
原則ヲ樹立セリ

(1) 既存租界領土權カ現在如何ナル程度ノモノナリトスルモ該權利
ハ元ハ支那帝國政府ヨリ直接出テタルモノナルコト

(2) 右租界權ハ道路警察市稅等純然タル市政事項ニハ局限セラル
ハキコト

(3) 外國人ト使僱關係ナキ支那人ハ支那官憲ノ完全ナル治下ニ在ル
ヘキコト

(4) 各國領事ハ依然其ノ國民ニ對スル行政權ヲ有スルコト市官憲ハ
公安ヲ審ス者ヲ逮捕スルニ止メ支那又ハ外國官憲ニ引渡スコト

(5) 市行政組織中ニハ諮問員タル一支那人ヲ含ムヘク支那人居住者
ニ關シ其ノ同意ヲ求ムヘキコト

租界居住者ノ増加ニ伴ヒ屢々其ノ擴張要求ニ會ヒ支那政府ハ常ニ
之カ承諾ヲ躊躇シ來レリ此ノ結果外國ハ常ニ政府ニ對シ嚴重ナル
抗議ヲ申込メ爲ニ友好關係ヲ害スルコト尠カラス加之租界擴張問
題ハ列國間ニ紛糾ヲ惹起セシムルコト一再ニ止ラス
更ニ又近時設置セラレタル租界ニ付テハ條約ノ形式ニ依リ市政ノ

行使權ヲ讓渡セラレタルモノナリト雖初期ノ租界ハ之ト同シカラ
ス此等ハ所謂「土地規則」(Land Regulations)ニ準據
シ支那官憲ト列國領事トノ間ノ合意ニ依リ設置セラレモノナリ
然レ共何レノ場合ヲ問ハス今ヤ獨立市政ヲ維持スルノ理由ハ更ニ
存セス昔時始メテ對外貿易ヲ開キタル時ニ於テハ其ノ理由アルハ
キモ南京及長沙ニ於ケルカ如ク租界ノ存在セサル都市ニ於テ支那
人及外國人カ願調ニ友好關係ヲ維持スルヲ見レハ之ヲ廢止スルモ
何等ノ懸念アルコトナシ
他方支那ハ近年來市政組織ニ著大ノ追歩ヲ爲シ租界廢止後ノ行政
上ノ責任ヲ取ルコト容易トナレリ北京ノ如キ大都市行政カ外人
ニ満足セラレツツアルノミナラス一九一七年以來支那政府ノ施政

ニ係ル天津漢口舊獨塊甸租界ノ行政モ未タ重大ナル批難ヲ蒙レル
コトナシ

尙又租界制度ノ維持ハ通商權ノ享有ニ就テ必須的條件ニハ非ス最
近二十年來支那ハ斷子トシテ對外貿易獎勵ニ從事シ來レリ管ニ條
約ニ依リ條約權ノ數ヲ增加セルノミナラス自發的ニ内國都市ヲ開
キテ對外貿易ヲ振作セシメタリ例ヘハ濟南ノ如キ外國人ハ支那人
ト同一資格ニ於テ支那ノ市政及警察規則ニ遵ヒ來リタルモ其人口
次第ニ増加シ來リ繁華ナル商業地トナラントスルヲ見レハ必スシ
モ外國人ニ特權ヲ付與スルノ要ナカルヘキナリ

(四) 結論

如上諸考察ヲ根據トシ支那政府ハ租界全部ノ返還ヲ熱望スルモノ

ナリ而シテ支那政府ハ租界ニ在スル外國ノ甚大ナル利益ヲ斟酌シ
外國人ノ不安ノ原因ヲ避クル爲返還ニシテ幸ニ列國ノ容ルル所ト
ナラハ一九二四年末迄其ノ實行ヲ延引スルコトヲ承認セントス
支那政府ハ他方決定的返還ヲ待テ主トシテ支那人居住者待遇ヲ公
正ニシ且決定的返還ノ準備ヲ目的トシ租界規則ニ左記改正ヲ加ヘ
ント欲スルモノナリ而シテ右改正ハ何等條約圖ノ市民カ享有スル
特權ヲ害スルモノニ非ス

(1) 支那人タル市民ハ租界内ニ於テ外國人ト同一條件ニ依リ土地所
有權ヲ有スルコト

(2) 租界居住ノ支那人ハ行政委員選舉權及被選舉權ヲ有スルコト

(3) 租界外ニ於テ管轄支那裁判所ノ發シタル令狀及判決ハ何等外國

官憲ノ干渉ヲ受ケスレテ租界内ニ於テ實施力ヲ有スヘキコト
(4) 外國陪席判事ハ支那國民ノミニ關スル繁爭事件ノ審理又ハ判
決ニ參與セザルコト

第七、 關稅自主權回復問題

支那ニ於ケル現行關稅制度ハ其源ヲ一八四二年英支間南京條約ニ發
シ其後一八五八年英・佛等諸國 支那トノ間ニ締結セラレタル諸條
約ニ於テ始メテ凡有貨物ニ對シ從價五分稅率ヲ認メラルルニ至リ而
シテ此等諸條約及其後其他ノ諸國トノ間ニ締結セラレタル條約ニハ
定期改訂條項存シタルニモ拘ラス單ニ一九〇二年及一九一八年ニ兩
度ノ改訂ヲ見タルノミニシテ而モ其改訂ハ價格評定ニ關シテノミ之
ヲ爲シタルニ過キス稅率ハ依然トシテ從價五分ニ固定セラレタリ
右ノ如キ稅率ハ必需品及奢侈品ニ對シ同一稅率ヲ課スル結果トシテ
支那ノ財政及工業ノ發展ヲ阻害スルノミナラス次ニ搦配スルカ如キ
幾多ノ批難ニ値シ當然改訂ヲ必要トスルモノナリ

(一) 相互主義ノ欠除セルコト

支那ハ前掲諸條約及最惠國條款ニ準據シ列國ニ對シ協定稅率ヲ付與セリ然レトモ支那ハ列國ヨリ何等相互的待遇ヲ受クルコトナシ此レ相互同一利益主義ニ據ルヘキ關稅事項ニ關スル國際慣例ニ背反スルモノナリ

(二) 稅率ノ劃一

一八五八年差等稅率主義撤廢以來奢侈品ヨリ必需品並原料品ニ至ル迄全然同一ノ率ニ依リ課稅セラル次表ヲ一見スレハ如何ニ支那於ケル現行制度カ他國ノ夫レト異ナルカヲ知ルヲ得ヘシ

一九一三年奢侈品輸入稅率

英國	煙草(斤)	酒類(ガロン)
英國	八志六片	一五志二片
米國	二五「パーセント」及一八志九片	一〇志一〇片
佛國	一磅七志二片半	二志六片半
伊國	一二志八片半	二志九片
日本	三三五「パーセント」	一〇志二片
支那	五「パーセント」	四片

他方斯ル協定稅率ノ低廉ナル結果收入ノ不足ヲ來シ之カ爲免稅スヘキ貨物ニ課稅スルヲ餘儀ナクセラルルニ至レリ次表ハ一九一三年ニ於ケル無稅輸入貨物ノ百分比ナリ

支那	六・五%
日本	四九・五%
佛國	五〇%
米國	五四・五%
英國	九〇・七%

尙次表ハ如何ニ割一稅率カ現在ノ狀態ニ適合セサルカヲ示スモノナリ

改訂稅率表中ニ列舉セラレタル物品數	當該年ニ於ケル輸入總額(阿片ヲ不含)
一八五八年	約三千萬兩
一九〇二年	約二億八千萬兩
一九一八年	約五億四千五百萬兩

即チ最近六十年來課稅物品數ハ四倍以上トナリ輸入總額ハ十八倍ノ多キニ達シタルモ五分割一稅率ハ變更セラレス一八五八年支那カ五分率ヲ承認シタルハ其ノ對外貿易謂フニ足ラサリシカ爲ナルモ爾來該貿易ハ著シク増大セリ依テ支那ハ今日課稅負擔ノ分配狀趨カ極メテ不公平ナリトスルノミナラス其ノ國家經濟ハ原料品及機械類ノ輸入ヲ獎勵セス獨リ奢侈品輸入ノ非常軌的増大ヲ招クカ如キ制度ニ依リ重大ナル影響ヲ蒙リ居レリト思惟ス

(三) 稅收ノ不足

從從價稅率五分ハ既ニ他國ノ夫ニ比シテ低廉ナルニ加ヘ諸條約ニ規定セラレタル定期改訂ハ未タ會テ適當ノ時期ニ實現セラレタルコトナク尙且改訂ノ場合ニ於テモ評價ノ基礎ハ當該時期ノ現實物價

ニ比シテ常ニ低廉ニ過キタリ即チ一九〇二年改訂ノ際ニハ一八九七年乃至一八九九年ノ平均價。一九一八年改訂ノ際ニハ一九一二年乃至一九一六年ノ平均價ヲ採用シタリ斯ノ如クシテ支那ハ通常豫算收入二億八千萬兩ノ中輸入税トシテ千八百萬兩即チ七一パーセント以下ヲ徵收スルニ過キス於茲支那政府ハ他ノ方法ニ依リ財源ヲ求ムルノ餘儀ナキニ至リ世上愚税ト稱セラルルモノヲモ之ヲ存置セサルヲ得ス例ヘハ釐金ノ如キ支那人及外國人ノ悉ク攻撃スルトコロナルモ四千萬兩ノ收入ヲ齎スカ故ニ之ヲ廢止スル能ハサルナリ

(四)眞ノ意味ノ改訂ノナカリシコト

前記ノ如ク一九〇二年及一九一八年ノ改訂ハ全然名ノミノモノニ

シテ課税ノ基礎タル評價ノ改訂ニ止マリ事實上支那ノ關稅率ハ半世紀以上何等ノ變更ヲ受ケザリキ

釐金ノ積弊ハ久シキ以前ヨリ列國ノ認メ來リタルトコロニシテ現ニ一九〇二年及一九〇三年ノ英米日トノ通商條約中締約國ハ支那カ釐金ヲ廢止スレハ稅率ヲ五分ヨリ一割二分五厘ニ引上テヘシトナセルモ右改訂ハ關係列國全部カ其ノ承認ヲ通知シタル上ニ非ザレハ實現セラレスト爲セリ斯ノ如キハ條約ヲ死文タラシムルモノナリ何トナレハ多數列國ノ一致ハ實現不可能ナレハナリ支那カ關稅事項ニ付實行上他國ト同様ノ權利ヲ享有セサルコトハ爭フヘカラサル事實ナリ

國際聯盟ノ目的ニ合致スル爲支那政府ハ列國カ支那ノ關稅協定改

訂ノ權利ヲ承認セラレンコトヲ切望シ本平和會議ヲ以テ總行ノ協
會ト信レテ該承認ヲ得ント欲スルモノナリ
支那政府カ本會議ニ於テ原則トシテ採用セラレンコトヲ欲スルト
コロハ二年後ニ於テ現行稅率ニ代フルニ支那ト協定國トノ通商
ニ適用セラルヘキ一般稅率ヲ以テセムトスルニ在リ然レトモ支那
ハ先ツ以テ其ノ條約國トノ間ニ在記ノ條件ニ依リ稅ニ利益ヲ得
ル物品ニ對シ新規定稅率ヲ確定センカ爲商議ヲ開始セント欲ス
(1) 凡有恩惠的待遇ハ相互主義ニ據ルコト
(2) 品種ニ依リ稅率ニ差等ヲ設ケ奢侈品ハ必需品以上ニ原價品ハ夫
レ以下ニ課稅スルコト
(3) 必需品ニ對スル新規定稅率ノ基礎ハ一九〇二年乃至一九〇三

年ノ通商條約ニ規定セラルル釐金廢止ノ結果起ルヘキ收入ノ減
少ヲ彌補スル爲一割二分五厘以下ナラサルコト
(4) 新規定稅率ニ依リ定ムヘキ一定期限到達後支那ハ評價基礎ノミテ
シス稅率其ノモノヲ改訂スルノ自由ヲ有スヘキコト
列國ニシテ支那ニ對シ如上特典ヲ許與スルニ於テハ支那ハ完全ニ
釐金ヲ廢止シ通商ノ發展ヲ阻害スヘキ制度ヲ根絶スルニ躊躇セス
支那政府ノ目的トスルトコロハ保護關稅制度ヲ採用シ又ハ貿易ニ
過重ナル負擔ヲ課セントスルニ非ス唯現行稅率ハ不公平非科學的
且舊式ニシテ支那現下ノ經濟的要求ニ副ハサルカ故ニ其ノ改訂ヲ
要求スルニ過キス
輸入激越ト國債不斷ノ増加ハ今ヤ財政經濟上重大ナル危機ヲ齎セ

リ之カ危険減殺方法トシテハ關稅法ノ確^止ト輸出貿易獎勵トアル
ノミ本提案ノ精神ハ支那全國民ノ與^等ニ副フトコロニシテ支^後那全
國カ支那ニ對シ他ノ獨立國ノ享有スル關稅制度ヲ賦與シ以テ支那
國民ヲシテ其ノ富源ヲ開發セシメ世界生産物ノ第一消費者トラシ
メ且ツ文化ノ進歩ニ貢獻セシメンコトヲ望ムヤ切ナリ

結 論

本覺書ヲ平和會議ニ提出スルニ當リ支那政府ハ其ノ取扱ヘル問題カ
今次世界大戰ヨリ直接發生シタルモノニ非サルコトヲ了知セリ然レ
トモ平和會議カ敵國トノ間ニ平和條約ヲ締結スルト共ニ國際聯盟規
約ニ表明セフレタル正義平等民族主義尊重ノ原則ニ立脚セル新世界
ヲ建設スルコトヲ目的トセルコトハ支那政府ノ熟知スルトコロナリ
而シテ此等問題ハ本平和會議ニ於テ決定セラレサルヘカラス何トナ
レハ若シ之ヲ放置スルニ於テハ世界平和ヲ再ヒ擾亂スヘキ紛争ノ禍
根ヲ將來ニ殘スコトトナレハナリ
依テ支那全權ハ平和會議ニ對シ本覺書ヲ審查シ次ノ如ク解決センコ
トヲ要求ス

(一) 勢力範圍

關係列國ハ各々其ノ關スル所ニ從ヒ支那ニ於テ何等勢力範圍ヲ所有
セス又之ヲ要求セス且支那ノ主權ヲ害シテ勢力範圍ヲ創設スル爲留
保的領土利益若ハ優越權利ヲ賦與シ又ハ賦與シタルモノト解釋セツ
ルヘキ既存支那トノ條約。協定。覺書又ハ契約ノ改訂ヲ行フノ意思
アル旨ヲ宣言スルコト

(二) 外國軍隊及警察隊

何等合法ノ理由ナクシテ現ニ支那領土内ニ存在スル外國軍隊及警察
隊ハ之ヲ即時撤退スルコト。一九〇一年九月七日議定書第七條及第
九條ハ之ヲ廢止スルコト及此等二條ニ依リ駐屯スル公使館守備隊ハ
此點ニ關スル本會議ノ宣言ノ翌年中ニ完全ニ之ヲ撤退スルコト

(三) 外國郵便局及有線無線電信局

總テノ外國郵便局ハ一九二一年一月一日以前ニ之ヲ廢止スルコト。
外國有線無線電信局ヲ今後支那領土内ニ建設スルコトヲ得サルコト
及此種ノ現存設備ハ總テ正當ノ補償ト引換ニ即時支那政府ニ引渡ス
コト

(四) 領事裁判制度

一九二四年末迄ニ五法典ノ發布及舊地方廳所在地ニ新裁判所ノ設立
ヲ實現ストノ支那ノ約束ノ下ニ條約列國ハ領事裁判權ノ放棄ヲ約定
スルコト

右廢止迄ノ經過的措置トシテ列國ハ左記二項ヲ約定スルコト

(1) 支那人カ被告タル民刑事裁判事件ハ訴訟手續及判決ニ領事館官

吏又ハ代表者ノ介在ヲクシテ總テ支那裁判所ニ依リ審理判決セラルヘキコト

(2) 支那裁判所ノ正規ニ發シタル令狀及其ノ宣告シタル判決ハ並ニ外國領事又ハ司法官憲ノ審理ヲ經スシテ租界及外國人所有建物内ニ於テ實施セラルヘキコト

(四) 租借地

租借地ハ支那ニ返還シ支那ハ土地所有者ノ權利保護及同地域行政ノ爲其ノ負フヘキ總テノ義務ヲ負擔スルコトヲ約スルコト

(六) 租界

列國ハ一九二四年末迄ニ各其ノ租界ヲ支那ニ返還スルコトヲ承認スルコト。支那ハ租界ニ於ケル土地所有權ノ保護ヲ約スルコト。過渡

的措置トシテ現行租界組織ニ變更ヲ加フルコト

(七) 關稅自主

會議國一致ヲ以テ決定スヘキ期間終了後支那ハ自ラ其ノ關稅率ヲ決定スルノ自由ヲ有スヘキコト

右期間中支那ハ列國トノ間ニ(A)相互主義ニ立脚シ(B)奢侈品及必需品間ニ區別ヲ設ケ(C)必需品ニ對スル協定率ヲ最低從價一割二分トスルカ如キ關稅協定締結ノ商議ヲ爲スノ自由ヲ有スヘキコト

右協定締結ニ至ル迄ノ過渡的措置トシテ現行稅率ハ一九二一年末ニ之ヲ廢シ無條約國トノ通商ニ適用セラルル一般稅率ヲ適用スヘキコト。他方支那ハ右協定締結後直ニ釐金ヲ廢止スルコトヲ約定スヘキコト